

出席者 (ABC順)

同志社の

一般教育を求めて

一般教育委員長
大学文学部教授

浜田

敷田

清夫

大学文学部教授

倉敷

本通

千稔

大学文学部教授

松本

方純

晴雄

大学神学部教授

緒方

純雄

女子大学長

酒井

卓康

(司会)

横山

卓雄

(大学工学部助教授)

同志社らしい一般教育の創出

横山 ご承知のように、大学のほうでは近年一般教育の改革がいろいろ進んできました。特に、一昨年は宗教学の改革案の検討、その廃案という事件があり、それから昨年度には長期ビジョン検討委員会の活動報告書が出たわけです。一方、私大連盟では、一般教育についていろいろと議論されております。そういう背景がありますので、この座談会をどういう形でやろうか、考えたんです。長期

ビジョン検討委員会のメンバーでいただきますと、三年間いろいろ議論していたので、だれがどんなことを考えているか、ほとんどわかってしまっています。そういう形で座談会を組んでもあまり建設的ではないので、なるべく検討委員会と関係ないところで、検討委員会の出した問題、あるいは世の中の進み方というようなことを背景に、忌憚ないご意見をいうことで人選させていただきました。

同志社の一一般教育についての現在のテーマは、私大連盟の研究会で明らかになってきておりますように、「大学の特徴ある教育」、つまり同志社でなければできないような教育をいかにつくり出していくか、ということだと思うわけです。

たとえば、専門科目の場合ですと、そこへ「同志社らしい」とつきましても、たとえば「同志社らしい経済学」とか「同志社らしい数学」とかいうのはなかなかむずかしい。そうしますと、私立大学同志社として立学の精神に合うような、あるいは大学の設立の趣旨に合うような形の教育というものは、どうして

も一般教育の中で考えられなければならないと言えるのではないかとのことです。これは私大連盟で問題になっているのと同様に、大学の一般教育の長期ビジョン検討委員会でも、ひじょうに強調されておるわけです。

もう一つのテーマは大学のほうで現在までにいろいろな改革案で問題になっていたことです。宗教学を必須にするかしないかとか、あるいは一般教育の専任者の研究教育条件をどうするかということなどで、いろんな文書が出ております。宗教学の問題ですと、女子大のほうはたしか聖書というのだと思いますけれども、それが必須であることが「同志社らしい」ということとどう関連するかということだと思えます。

それからもう一つは、同志社大学の歴史過程の中に、一般教育というものとのちえ方が出ているのではないか。いわゆる完全縦割り制あるいは完全横割り制をすでに十数年前にやめてしまつて、一般教育委員会の運営によってやっていくというようになった。そういう改革が比較的進んだ形で行われている。

だいたいそのようなところが同志社らしい一般教育を考えるにあつたてのテーマじゃない

いかと思つております。きょうは日ごろ先生方がお考えになつておることを好きかつてにしゃべつていただくということで、進めたいと思ひます。

最初にその同志社らしい一般教育をつくらうというテーマをお聞きになつて、どんなことをお感じになるかということからでも入らせていただいたらどうかと思うんですが。

浜田 いずれ緒方先生から、このテーマにいちばん関係があります立学の精神、建学の精神についてお話いただけるんじゃないかと思ひますので、制度的な同志社大学の特徴を一つだけ申し上げたいと思ひます。同志社の場合、先ほどおっしゃいました不完全縦割りという形になっています。それぞれの学部は専門志向で当然だと思ふんですけども、一般教育に関する限り、学部の差なしに同じ教育が行われ得るという場が与えられているわけでございますね。同志社の門をくぐつた限りは一般教育を共通のものとして全学の学生が受けられるという点で、同志社教育の特徴を出すのに、ひじょうに有利な条件が整つていると私は思ふのでございますが。

横山 酒井先生、私が申し上げたのは主と

して大学のことなんで、女子大の紹介を含めてよろしく。

酒井 女子大も一般教育についてはいままですいぶん苦勞をしてまいりましたけれども、十分な形で一般教育を行うことはなかなかむずかしいように思ひます。数年前から、だいぶ内容を改訂してきておりますが。

そのなかで、一般教育と専門教育の関係をもっと緊密にしていくべきじゃないかという観点から、これも一体化とか総合化ということろまではいきませんけれど、従来はだいたい一般教育というと二年次までで終わつてしまつていたのを、何とか三年、四年にまで延ばしたいという考えで、三十六単位九科目を一年次は四科目以内、二年次は三科目以内、三年、四年で二科目以上と、履修方法を規制したのです。いわゆるくさび型の形を採用したわけです。それからできるだけ自由選択の枠を広げて、バラエティーに富んだ科目を提供しよう、科目数もふやしてきました。

それにもう一つは、できるだけ人格的な教師と学生との触れ合いを多くしていくべきじゃないかということで、一般教育を小クラス制でというふうなことを考えてまいりました



浜田清夫 氏

が、これはなかなか実行がしにくく、まだ十分に実現されてはおりません。

それから、これは同志社大学のほうでやっていらっしやるので、私もおおいに関心をもたせていただいておりますが、総合科目の設置でございます。女子大でも一応科目としては置きましたが、いまのところ個人の先生が担当しております、共同体制による総合科目の実施という形にはなっておりません。それから先ほどもちょっとお触れいただきましたように、女子大ではキリスト教の授業科目を、「聖書」という名前で一般教育の外枠に六単位、これは一年から三年まで必修で、二単位ずつ置いております。

それから過去約二十年にわたってやっておりました「人間関係」ですが、これは一年の

前期と四年の後期に、講義と小人数のディスカッションとを並行させるような形で実施してまいりましたが、学生数の増加にもなつて教師の負担が重くなり、全学的な協力もなかなか得にくいままに、とうとうやめてしまいました。こんごもできるだけ同志社女子大としての特色のある一般教育の内容編成をしたいと念願いたしております。

横山 大学に比べると、女子大のほうがひじょうに特徴があると思いますね。

緒方 私は最近一般教育を担当していないので、的確に事情をとらえていませんが、ある意味で外からみると、一般教育の問題はなにかセカンダリーのように、特に専門科目担当の教師・学生の中にも、そういう考え方をしているのが一つの大きな問題ではないかと思ひます。専門科目担当者も一般教育担当者も、もっと大学全体として一般教育に取り組んでいかなければならないと思ひます。

それから同志社的なものと言えば、先ほどから先生方が述べておられるように、キリスト教主義が同志社教育の根底にあります、もっと一般的な表現をすれば、人間形成というものがほかの大学にまさって同志社におい

ては考えられ、努力されていると私は思ひます。それが同志社教育の特徴だと思ひます。

松本 同志社らしい一般教育というのはわかるんですね。ただ、技術的なことになるかもしれませんが、たとえば一年生の諸君にいきなりこれが同志社らしい一般教育だということ、おしつけていきますと、それがお仕着せになるのではないかと思ひます。ですから、もしやるならば、三年生とか四年生とかに。それが一つの点。

それからその取り上げ方が問題だと思ひます。たしかに、キリスト教主義は建学の精神に、ひじょうに口はばつたい言い方をしますけれども、大学を支えてきた教員、または大学で学んだ卒業生が、それぞれの学問領域の中でどういような仕事をしてきたのかというところも、あわせて追求しなければと思ひます。そのように考えていきますと、実のり方があるんじゃないかと思ひます。

総合科目は一般教育の 理念の具現化

倉敷 同志社の一般教育の特徴というの



倉敷千稔 氏

は、諸先生方も申されたとおりですが、それに加えて、私は総合科目が生まれてきたその過程に、問題点が含まれているように思います。そして、一つの解決策として総合科目が設置されるようになったと思います。一般教育というのは、もともと総合科目的な性格のものではないだろうかとも思うんです。それが長年の経過の後、やっと六年前に総合科目としてオファーされるようになったのですね。ですから、一般教育って何かという問題を探りながら、そして、それに見合うものを探りながら、そして、これに展開していかなければ一般教育の認識は改まってこないんじゃないだろうか。そういうふうに思っています。

のがあまりに高尚過ぎる。ところが、現実には無理がある。小クラスの問題、学生側教員側の意識の問題とか、大学の対応のしかたとかいろいろの問題で、どうも理念と実情があまりにもかけ離れている。理念だけで話をしていくといいんですが、現実はどういうにもならない。そういうところが若干ある。いままででしたら文部省の設置基準を満たすばかりに一生懸命になっていた。ところが、それではどうも私立大学は困るんじゃないか、「同志社」というもの、一つの寄りどころといえますか、そういうものをつかまえていくということになった。現状はそんなところにあるんじゃないかと思うんです。

緒方 専門科目カリキュラムの理念などについてのディスカッションなどはなくても、一般教育については私たちはまだ理念を語り得る、あるいは語らねばならないということ

そして現状をこぼしているような事実がありますね。ですから、私にとつてこんな機会はないへんありがたいと思っています。

横山 担当者としては工夫する段階が多いという面もあるかもしれませんですね。

緒方 そうですね。

酒井 緒方先生もおっしゃいましたように、どうしても一般教育というのは第二義的に考えられやすく、たとえば、さっき私も小クラス制ということを申しましたけれども、一般教育は多人数の講義ものでいいんだという考え方はやっぱりございますね。そういうところを改めるためには、一般教育のスタッフと専門教育のスタッフとがもっと緊密に話し合っていく必要があると思います。専門教育と一般教育との関連性とか、相補的な関係とか、一本化とか総合化とかいわれますけれども、実際にはなかなか相互の理解や協力の届かないところがあるようです。

横山 教養ということばがいけないですね。教養をつける教育という雰囲気はどうしてもある。一般教養ということばは、実はないんです。同志社では、「教養」という言葉は正規の文書にはまったく出てこないわけで



松本通晴氏

す。学生に、教育というものと教養は違うんだからといつも言うんですけど、それが二義的ということになるんだと思いますね。

緒方 一般教育が専門教育の準備コースではないとか、基礎ではないとか、一般にいわれていますが、本当に理解した上で述べられているかどうか、かなり疑問ですね。

倉敷 その点は一般教育を設置した過程に大きな問題があるんじゃないでしょうか。

横山 システムとしてですか。

倉敷 教科として置くときに、だれがそれを担当するか、その担当者がどういう所属になるかというような問題、さっき、横山先生がおっしゃった教養、あるいは教養部というような表現等も含めていろいろなことが関連しているように思います。

制度と人間

浜田 確かに制度の枠組みの影響は無視できません。先ほども同志社の場合には不完全縦割りということではじょうにユニークだと申しましたけれども、一般教育とは何かという理念の面で、一般教育関係の会合では、毎年同じ問題が問われるわけでございます。ということとは、結局不明確であるということ、定着していないということですけども、その場合に一般教育がいわゆる諸専門の基礎であるとか、あるいは独立した人間形成の場合、専門への入門じゃなしに独立した対等なものであるというような理念的なことはよくいわれるわけですけども、現実の問題として、横割りの場合はもちろんのこと、縦割りの場合でも一、二年生に集中して、いわゆる大学の教育の初期の教育を分担するような形になっておりますね。縦割りの場合、専門の先生と一般教育の先生が同一学部におられるわけですから、どうしても一般教育が低学年に集中するため、質の低いもの、重要でないものとして映り、専門に対する一般教育の従属関係がはっきり出てくるわけです。ですから

ら、一般教育の理念の上で、人間形成よりも、入門的な面がどうしても強調される。そういう意味では不完全縦割りを採る同志社の場合、少なくとも六学部が共通のプログラムをオフアーできるということは、専門からの独立性をある意味で保障していると思うんですけど。それがうまく生かされているかどうか、不完全縦割りならば申し分ないかどうか、は別の問題です。最近、関西のある大学が一般教育の研究センターをつくった。よく見られるタイプですけども、その大学は縦割りでございますから、各学部が独立して、てんでばらばらに一般教育をやっております。一応形式的には一般教育委員会的なものがございまして、一般教育関係のカリキュラムはできるだけ同じようなレベルのものをオフアーしなきゃいけないという自覚はあるんですけども、各学部から出られる委員の方は、行政的なレベルでのコーディネーションをやるぐらいであって、カリキュラムの内容まで手がまわらない。従来横のつながりがなく、孤立化していた一般教育の先生方が共通の場を求めて研究センターを作られたわけです。今まで自分の大学の固有のものを生



緒方純雄 氏

かせるような場がなかったわけですから。

そういうことを考えてみますと、同志社の場合は不完全縦割りで、いろいろと問題はございますけれども、一日の長があると自負しております。いつも私大連盟とかその他いろんな会合に出て他の大学の話を伺いますとき、われわれはついぶん進んでいるなという感じを起こすんです。決して、それが現在の状態で満足だという意味ではございませんけれども。要するに、一般教育が、専門への入門コース、第二義的なものなのか、あるいは、実現はひじょうにむずかしいでしょうけれどもあくまでも人間形成的な特別の使命を帯びたものであるのかという理念問題が、やっぱり制度の枠によつてずいぶん影響されるんじゃないかと思うんです。

松本 一般教育が専門の基礎課程とか入門課程とかいうことじゃなくて、一般教育のある科目は入学したときにすぐやらなければならぬが、他の科目はむしろ三、四の高学年に配置したほうが適当だということもありませんね。そこらをもっと柔軟に処理できないものかと思うんです。そうすれば、多少は、そういうものにたいしてチェックができるのではないのでしょうか。

横山 教える先生方が自信をもつておられないんだとぼくは思います。戦後、学制がパツとかわりまして、一般教育をしろといわれたときに何していいかわからなかった。それで自分の専門のことを最近のことばで言えばシコシコ教えてみて、一般なんだからそんなに深く入ってはいかんのだろうというので、ざつとやったというふうな歴史があるのではないか。お教えになった先生方というのは自分が一般教育を受けておいてならないですね、そのよさも悪さも何もわからずとにかく教えたということなのでしょうね。私は初期のころの一般教育を受けてきた人間なんですけれど、やはり魅力がなかったわけですから、最近になってやっと、一般教育というのは、

知識を教えるものじゃなくて、人間が何かテーマを与えられたときにどうするか、私は自然科学をやっていますから、自然科学的なものの思考方法で、たとえばあるテーマがパツと出てきたときにどう人間が対処するかということをお教えるんだと。その場合に、人間というのはいろんな感性があつてパツと直観的にこうだろうと思う人もいれば、あるいはいろいろの文書を調べてやっていくという人もある。ただ、その自然科学的な手法というのはこういうふうにして、結論としてこういう形のイメージができるんだということを教えたらいいのではないかと、ぼくはぼくなりにそんな考え方をいまもっています。学生の側はどうかという、結論だけ教えてもらつて、どういふ答案書いたら通してくれるんですかという雰囲気はどうしてもある。だから、やっぱり教えるほうの教師が何かちゃんとテーマを持ってない、一般教育というのはできないという感じがしています。

倉敷 さつき浜田先生や、松本先生もおっしゃったことに通じますが、十年ほど前に近畿の一般教育研究協議会で、一般教育はファンダメンタルなものなのか、ベーシックな



酒井 康氏

ものなのかという討議が長い間続けられたことがあります。その時は、特に同志社の一般教育が進んでいるということから、同志社の先生方が何人か講師に呼ばれて、いろんな角度から話をされ、一般教育の担当者もそれについて真剣に考えたことがあったと思うんです。そのときに横山先生がおっしゃったように、一般教育はものの考え方を養うなど、日常生活との結びつきがひじょうに強いものだという発想から、教科内容を考えていかないと、うまくいかないという結論になり、そこで、同志社では、その解決策の第一歩として総合科目を置くようになったと思うんです。

意欲を喪失させる原因は

横山 もう一つ教師のほうから言えば、熱

心にならないのは一般教育をやってもメリツトがないということがあるみたいです。

いまの問題とちよつとはずれるかもわかりませんが、たとえ同志社なんかでしたらシステムの問題として、大学院手当出すぐらいなら、一般教育手当というのを同額ぐらい出せば少しは違うのではないかと、どこかで話をしたことがあるんです。たとえば、私は同志社では一般教育やっていますけれども本来の専門分野はほかにありまして、それはかつてにやっておるわけです。私は京都大学出身なので、京大の大学院の学生が週に数人たずねてくるんですけれども、大学院生を教えるほうが楽なんです、何も言わなくても通じますから。ところが、一般教育はもう一つしんどさがある。それを無視してはいけないうんじやないかという感想もありますね。

松本 私もそうだと思うんです。たとえばいま新学期でしょう。三百人、四百人の新しい学生諸君を相手にして一時間半、とても学生諸君の要求を満たし得ないです。それほど能力は私にはないです。ですから、そういう面での自分に対するインパクトはひじょうにおおきいんです。文学部でもっている科

目と比較して、それは内容的に同じインパクトだと言えますけれども、しかし、私には与えられるインパクトははるかに一般教育のほうがきついですね。これをどういう形でやっていくかということになりますと、ことばではほんとに言いきれないような、そういう苦しみがあるんです。ことばで言いつても解決の道はなかなかないものだから、結局、みんな「しんどい」ということで黙ってしまふんだと思うんです。それを何とか少しずつ打開していきませんと、いつまでもたっても同じようなことを繰り返していくというようになると思うんです。

横山 理念がりっぱすぎるものをやるというのはいへんしんどいことですね。だからたとえば立学の精神に合った一般教育をなると、宗教学だとか聖書だとかいうことでやれと言われたら、先生方しんどいんじゃないですか。ぼくはそう思いますけれども。

緒方 何か自分の最も内的なものと格闘してしか講義ができないというしんどさがありますね。

先ほどかなり具体的な問題について酒井先生からも女子大の一般教育の実施方法が、い



横山卓雄 氏

わばくさび型であるとうかがいました。たとえば私は広義の宗教学でもまた限定された神学を専攻にしています。ところが、神学が今日では自然科学とダイアローグせざるを得ない領域が出てきました。前世紀のダーウィンのときは十年間ほどキリスト教とダーウィニズムとの闘いがあったのですが、今日の自然科学はそれよりもっとラディカルな思想をもっています。神学は、自然科学とダイアローグをせざるを得ない状況にあります。そうすると、もともと私などはサイエンスに不得手だったので神学に入ってしまったという経歴もあります。自分でも自然科学の本を買ったり、量子論を読んだり、それから分子生物学を読まざるを得ないわけです。これと似たようなことが問題意識となり、学部の子生に

専門課目を聞きながら、専門科目というひじょうに切り離された領域に位置を与えている一つの全体的、総合的な知識を要求するのではないのでしょうか。すると、やはり一年、二年次に、一般教育を受けるよりは、むしろ問題意識とのかかわりで、たとえば三年次、四年次に、一般教育が意味をもってくるのではないだろうか。そのように考えると、くさび型といったものが技術的にはひじょうにむずかしいけれども、この方向を今後多少打ち出していく必要があるはしないか、こういうふうに思います。

浜田 おっしゃるとおりですね。

酒井 学生を見ていますと、大学の四年間かなり精神的な成長が見られます。そうすると一、二年の段階で理解ができなかったことが三、四年の段階では理解の程度が進んでくる。それからもう一つは、一般に三年、四年ぐらいいなっていて初めて学問に対する興味というものが出てくるということなんだけれどもそれが必ずしも専門の学問をやったから興味が出てくるということじゃなくて、一般教育の学科目あるいは学問そのものに対してでも三、四年ぐらいいになると興味が出てくるわ

けですね。ほんとに学問とは何かとか、さっき横山先生が言われましたように、ある問題に直面してほんとに学問的のものを考えていくというような力が、その段階ではじめて開発されてくるということもあるんじゃないか。ですから私は、学生の四年間の発達段階に即した形で一般教育のカリキュラム構成ということも重要だと思えますね。

理念と現実

浜田 そういったニードといえますか、そういうことが各大学でも真剣に考えられるようになったのは、おそらく紛争が契機だと思えます。また四十五年の省令改正で、三十六単位のうちの十二単位を自由に振りかえられるという趣旨も、結局は機械的な十二、十二、十二の合計では決してバランスのとれた人間ができるわけじゃございませんし、また学生自身の価値観もひじょうに多様でございますから、ニードはそれぞれ違うと思います。改正前の一般教育では、この科目をとれば自然の分野の科目であるというようにきまっていたけれども、今ではかなり弾力的に運用できるようにになった。たとえば総合科目は人文・

社会・自然の三分野、あるいは人文・社会というように、うちの大学では複數分野の総合ということを考えているわけですが、それが学生自身のニードにあわせて社会に振りかえることも、人文に振りかえることも、あるいは自然に振りかえることもできるようになっています。それとも一つは、昔の専門だけで生きられた象牙の塔的な専門分化の方向とならんで、アポロ打ち上げに見られる総合化の必要が痛感されるようになりまして。昔のように情報が限られている場合にはそういう必要を感じなかったかもしれませんが、情報がいよいよにはらんしてまいりますと、断片的な知識を自分が総合しなけりゃいけないということをおの必要として感じるようになったと思えますね。

それはもともと各学生が主体的に消化・吸収して、自分の中で総合できればいいんですよけれども、これだけ変化の速度も早うございますし、なかなか取り入れにくいということで、学生にこちらのほうから手を差し伸べるような形での総合化ということでございます。教えられる担当者によってそれぞれ持ち味が違うわけですが、一つのいき方として

学び取られればいいと思うんです。

横山 一般教育というのは、そうすると理念を考えれば考えるほど小クラスでやらなくちゃいけないですね。

緒方 そうですね。

横山 いまのお話聞いてみると、いくら考えましても五百人いたらだめだというものもありますね。

酒井 知性の訓練とか思考のトレーニングというようなことは、多人数クラスの中ではできにくいんじゃないか。

緒方 いちばん理念をもって、そしてかなりの労を必要とするところの一般教育が、大クラスで実施されるという矛盾がありますね。一般教育の理念を私たちが主張していくと、そうした問題にぶつかってしまっ……。

横山 教室なんかでも、たとえばひじょうにプリミティブな問題をしゃべっていて「皆さん知っていますか」と言うわけです。そうすると学生が、しんとするというのが、最近やとばくはわかりました。というのは、昔は五百人いたらそういうことばが出ないんです。精神的に五百人を相手にして対話をし

ようという気がないわけです。ですから、どうしても単にレクチュアする、ぶつけることしかない。向こうはコミュニケーションがありませんから、ぼおつと聞いているだけなんです。教室の中でディスカッションが出てこない、知性の訓練にはならない。だから、どうしても大クラス即知性の受け売りというか、種本読んで、書ければ単位をやるというスタイルになる。

同志社で、全部小クラスにするのはちょっと無理ですね。そうすると、小クラスで密度の高い教育を受けたい人間にだけはそれを保障できるような制度をつくらないと、受けたいのどこへ行っても何も無いというのはいけないんじゃないかということを最近考えているんです。たとえば、大クラス講義で四単位与えてしまう。それでもう少し深めていきたいという人のために、小人数クラスをまた別につくっていくというようなことを、せめてしないと、一般教育というのはどうしても理念倒れになるという感じがする。

浜田 その点で横山先生もおっしゃっておられましたし、最近私大連盟のほうでも過去七年間の一般教育問題研究集会の成果

をまとめようということで、二、三日前にも編集会議がありました、いろいろと前向きな姿勢で提案が出されています。たとえば総合科目なら四単位の通年科目だけでおえてしまふということじゃなしに、現に同志社でも講義だけだしに、たとえば演習を加えたりあるいは実地見学を加えたりいろんな工夫をしていらっしやいますけれども、それをさらにゼミ形式で二単位つけ加えて六単位にするとか、そういった融通性のある形での、しかも継続性のあるような、対話のあるような――

――講義だけでは対話はありませんから――
そういう方向がいわれております。実行するとなるとなかなかむずかしい面もありますけれども、設置基準にしてみこちらがうまく利用するつもりでいけば、かなり幅はあるわけですから、そういう方向にもっていかなきゃいけないと思っているんですけれどね。

横山 教師側の立場としては、六十点でも四単位、九十九点でも四単位というのはものすごく抵抗があるんですね。たとえば、出席をとって半分しか出てないというのがわかれば、レポートがひじょうにすばらしくても九十八点つけるけれどもおまえは二単位にしろ

というような権利がありましたら、おもしろいと思うんですね。学生にしてみたら、マルかベケしかないんですね。六十点だろうが九十点だろうが、基本的には通ったか通らなかつたか。五十八点で落ちたのは教師がけしからん、六十点ぐらいいいじゃないかという思考方法になるんです。これは専門科目でもおなじかもわかりませんけれども。(笑)せめて一般教育にはそういうきめの細かさがないといけないんじゃないかという感じがする。

松本 いま私は新町へ毎週行きますが、二講時を終えたいへんなんです。狭いところに学生諸君が各教室から出てきますからね。あれ見ていたら、ほんとにもうたいへんだな、と思います。ああいう状況が少しずつ解消できるようなことを考えまさんと、また制度的にそういうものを何とかしていきまさんと、理念として考えてきたことも、なかなか実のらないんじゃないかと思うんです。

横山 逆のこともあるんですよ。二部は七講時ぐらいいになりますと、電気が全部消えていくんです。そうしますとキャンパスの中で光がついているのは掲示板だけということになります。ぼくは二部の総合科目をやっ

ますが、二部の学生は逆にかわいそうなんです。キャンパス・ライフがまったくない。いまの状況で大学に講義だけを受けにくるのはひじょうにさみしいんじゃないかと思えますね。全然逆の現象ですけれども、その間に何を置かかという……。

松本 制度の問題だけかたはつかないんだけれども、しかし、ある程度それを考えないことにはどうしようもない。

総合科学部構想について

横山 省令の改正によって比較的自由にやってきたということで、これからどういうふうにするかという問題は案外考えやすくなつたということは言えると思いますね。

私は、ご承知のように一般教育長期ビジョン検討小委員会の長をやっておりまして、三月三十一日に解散をしたんですが、そこで出てきたテーマがいろいろあります。一つは教員のほうが自信をもって教育する体制が必要だと。これは近藤先生がいつもおっしゃるんですけれども、教員が自信をもって教育するために研究生活を保障しなければならぬんだ。一般教育専任者には研究生活がないのは

おかしいんじゃないか、ということ。

それから学生のほうから言えば、専門以外に自分が選択というか、セレクトションして、これだけは大学の間にやっておきたいということをやろうと思ったら、クラブといいますが、サークルしかないという現状をやつぱり打破しないとけない。そうすると、そういう学生の意欲というものをオフアーして、なおかつ、動けるようなシステムということ、たとえば総合科学部というのを考えて出しておるわけですが。

たとえば、教員のほうは、全員自分の現在テーマを三つほど出していただいて、看板をかけていただく、こういうテーマなら学生の要請に応じられますと。それを一つのジャンルにし、もう一つはその学部なら学部、学科なら学科のテーマというを出して、そういう学科のテーマと教員個人のテーマと両方を学生に選択させたらどうか、つまり、学生は三年生のときにはどちらかのテーマで一つ進級論文を書いて、四年生になったら先生が個人的に出すテーマで卒業論文を書くというシステムをつくり上げたかどうかと言っているわけなんです。その基本的な精神は、先ほど

言いましたように、学生がやってみたくいと思うときには受けられる体制をつくっておくと、教員のほうが自分の研究を保障できるような、自信をつけられるような体制をつくるということが中にあるのですが。

緒方 先ほど倉敷先生が、総合コースが一般教育の当然な結果と言われたように思いますが。一般教育が設置された理由をこう考えてよいでしょうか。つまり、専門科目の専門化、分化が進み、ひじょうに細分化が進んだ中で、知識の総合性とか全体性、その中に自分位置づけていく人間形成というものが要望されて一般教育が設定されたのだと。そのように考えると、結局単一科目から一般教育が目ざしているものはひじょうに期待しにくい。だから、それは総合的とか全体的なものに眼を向けた一つの計画、作業というものがそこにたどりつくのではないのでしょうか。そうしますと、先生がおっしゃった総合科学という主張については私は賛成できます。ただ、総合科学という場合の科学はどういうふうに定義されますか。

横山 またごく個人的な感覚になりまして恐れ入るんですが、サイエンスというのは、

人間の精神活動の一環で、たとえば芸術だとかそれこそスポーツもおんなじだと思つておきます。そういう中でサイエンティフィックな認識方法を使うものを全部総称するというふうな考えておるんです。人間の頭脳活動のある一部分ということで、ですから人文も社会もすべて含むというふうに思つてます。

緒方 そうすると、それは結局精神においては現在の同志社の中では一般教育委員会が考え、努力し、期待しているようなものをも少し制度化したものであるでしょうか。

横山 そうかも知れませんが。

浜田 同志社の一般教育で、何がいちばん欠陥かと問えば、研究が教育に生かされないとの返事が返ってきます。研究と教育は大学人である限り切り離せないわけで、一般教育の先生方もそれぞれ専門をもっておられて、そしてそれを一般教育に還元していくということにたてまえてはなっています。もちろん私立大学には財政的な問題がございますので一般教育の先生方だけではないに、専門の先生方も六つ七つのこまをもたなければいけないということは、もう準備にさえ忙殺されるというところでございますので、決して一般教育だ

けが不遇だとは思わないですけれども、しかしながら、全体的に考えてみますと一般教育というのは教育のほうに重点が置かれ、研究のほうは重みが少ないと言えるのではないのでしょうか。学部の専門担当の方々は専門が当然の義務でございますし、研究と教育というのは一応曲がりなりに両立しているわけですけれども、一般教育の先生方はたとえば語学なら、先生はいつでもどなたでも交代できるわけです。専門科目の場合にはそういう互換性はあまり見られませんね。互換性があるということはある意味では教育中心に——研究のほうがいいといけないに決まっていますし、理くつの上ではあるといわれますけれども——なっているということです。

それと、学生を持たないということがもう一つの不満として聞かれるわけですね。専門教育の場合には自分の学生を持ち、しかも後継者を養成するということが保障されているわけですけれども、一般教育の場合には教育中心でございますので学生を持たないということが、教える側での責任が軽いという一つの面もあるかもしれませんけれども、逆に制度的にそうなっているためにどうしても安易

に墮する傾向もございます。ですから、自分が自分の学生を持ち、そして将来までめんどうを見られるような機構がございましたら、これはもっともっと充実したものになっていくだろうと思われれます。そういうこともありまして、横山先生が中心になって考えていただいた総合科学部構想もこの欠陥を除くことを狙っています。しかも、従来のような部門別の専門という形はとりません。これから考えていかれる段階でございますので最終的にどんなものになるか誰もわかりませんが、具体的な例として現に広島あたりがやっています。たとえば、地域文化学科とか社会文化学科だとか、環境科学学科とか情報科学学科とか、一つ一つの専攻ないし学科自体がすでにもう総合的な性格をもっておるわけですね。一般教育の先生方が研究も教育もその中で統合されるような形で、しかも一般教育に責任をもつてやっていくということになりますと、いまのような、研究が半ば軽視されている状態から一歩前進するんじゃないか。研究と教育との一体性が保障され、学生を持って責任ある教育ができるという、一つの枠組み

ができますので、二つの点が生かされるという利点があると思っているんです。

横山 学生の立場からは、たとえば法学部法律学科へ入ると、四年間学科は変わらないですね。何となく途中でいやになる人も出てくるし、新しい道へ進みたいという人もあるんじゃないか。そういう希望もいまの大学は保障してない。私らが考えているのは少人数の学部学生と大人数の他学部の学生を受け持つ一般教育を中心とした学部ですが、他学部の学生に対しては一般教育をやるんですが、いま一般教育は、教員が一生懸命やっています。条件があるんです。教育というのは感動させないと話にならない。感動させてその学生が先生のやっていることをやりたいといったとするとそれが保障できない。学生がやる気になったとたんに教員が断わらなければならない体制では、教育は成り立たないと思うんです。教員が一生懸命講義すれば、学生が必ず興味もつわけです。一生懸命講義することによって、いままで神学部にしたけれども自然科学やりたいという人間が現われたとき、転学部、転学科が可能ないようにしたい。そうでなければ真剣な教育態度が出るはずが

ない。そういうことがおきた場合には総合科学部へかわれるような、いわゆる専門研究を保障するようなことも考えなければいけないんじゃないかということも考えたのです。つまり、学生がある種のニードをもったときには、どこかへ行けばある程度満たされるといふ体制が要るんじゃないかと思うんです。

酒井 広島大学の総合科学部の場合、いわゆる教養部の組織があつて、それが発展したというかたちですが、同志社大学のように不完全縦割り制のうえに、総合科学部というものをつくりうとすると、なかなかむずかしい問題がでてくるかもしれませんね。実現すれば大きな改革だと思えますが……。

浜田 もう一つのねらいは、一般教育の同志社化です。戦後、教育法規により一般教育が必要となり、どこの大学もやっているわけですから、国立大学に右へならえ式になり、いわゆる大学の個性をなくしてきております。ですから、何とか各大学が個性を取り返さなければいけないということが盛んに叫ばれているわけですから、たとえば同志社の場合は、よその大学と比べて、そういう意味ではかなり同志社的な教育のできる場が

保障されているというわけなんです。具体的に科目が、たとえば同志社的な数学だとか同志社的な統計というのはひじょうにむずかしいわけですね。ですから、総合科学部ができますと、現在の利点をもう一つ補強する形でまったく同志社的なものが生み出せるのではないかと思えます。現在も総合科目として、「日本の近代化と同志社」や、「京都の自然と文化」のような特徴ある科目を置いておられますので、今のままでも同志社化はできるとのご意見もあるうかと思えますが、先ほど言ったような研究と教育の問題とか、あるいは学生を持つ持たぬの問題とかいろいろむずかしい問題がありますので、すべてを含めていまより進歩できるような形で、一般教育を同志社化するというねらいが、うまくいけば実現するんじゃないかという願いがこめられているのです。

松本 私、制度的にどうなのかよくわかりませんが、総合科学部という形で実現することはたいへんだとしても、何とか実現できたらと希望します。あわせて大学院を学部と切り離す形で構成できないものかと思えます。既存の各学部はそれぞれ大学院をもって

いますけれども、その中ではカバーできない領域の充実は必要だし、そういうことをカバーし得るような先生方もたくさんいらっしゃるわけだから、大学院をつくって、大学院の中に学部から学生を入れるとか、よその大学から学生を入れるとかというようにことをして、そこを一つの拠点にするということも考えられるんじゃないかと思うんですね。

浜田 しかし、大学院レベルで設けるとすると、大学院まで行かないと教育を受けられないということ、かなりニーズが高い人だけが行くというような形になる。

松本 大学院を設けて、そこで一つの拠点をつくるわけなんです。あわせて、教員には研究する場を保障し、教員はそれを一般教育の中に還元していくということになります。

カリキュラムに余裕を

横山 一般教育というのはひじょうに広範囲な内容をもっているんですね。たとえば同志社だったらドイツ語初級とか完全に一種のトレーニングというような状況、それから体育実技とか、これはしなければいけません。ほくは体育実技がんで二年間

でいいのか、四年までやらないのか、疑問でしょうがない。やらないならやらないで話はまだ別だし、やるならなんで四年やらないのかって思います。ああいう種類のものとか、そうかと思うとそれこそ総合科目で「日本の近代化と同志社」とか、そんなところまで全部含めて一般教育としてといわれているわけですね。だから、ひじょうに広範囲なものを全部引き受けるという体制はひじょうにむずかしいと思います。ただ、同志社の場合は不完全縦割りであったという十年年の歴史がありますので、その歴史の上に何か築いていくことができるのではないかと感じますね。

倉敷 いまの体育の場合ですが、それこそ生涯やらなきゃいけないものなんです、大学での教科ということになりますと、必要性よりも他教科とのバランスが優先され、どうしても制約を受けることになります。

横山 たとえば大学の卒業必要単位は百二十八単位か、百二十六単位ですが、同志社ですと百四十ぐらいとらせるところもあります、その中で何でもいいという単位を、たとえば十単位ぐらい置いたらどうでしょう。し

たいものはできるという体制がないと、つまり四年間体育を最後までやったけれども、それは単にやらせていただいたというだけです。カリキュラムに余裕を置いておくということが考えられたらいいですね。ほんとにわれわれは自然科学を出たんですけれど、たとえば法学部の法哲学か何か聞きにいつて、これも卒業単位に入れておいてくださいというのは、いいことだと思っただけですね。

倉敷 これは新しく設置基準が出たときに大学がどう対応するかということですね。基準を最小限度守らなきゃいけないものとするか、それだけやれば十分なものという取り組み方をするかにかかると思います。従来からある専門に対して、新しく一般教育があとから出てきたものですか、あとから出てきたものはまず基準に合わせることを考え、基準に合えば次は並列にしないで、従来からある専門のほうを充実するという考え方にどうしてもなる。他大学の一般教育と比べると、同志社の場合は随分進んでいるのですが、同志社の中で、専門と一般教育ということになると、いまのような問題が起きていると思うんです。体育を四年まで履習でき、それが卒業

必要単位にカウントされることになれば、同志社の一般教育の大きな特徴になりますからね。

緒方 横山先生、一般教育が先ほどのくさび型のこと、それから体育がなぜ二年間でやらなくちゃいけないかという問題についてですが、一般教育の科目を一年次、二年次で取得できなく、余儀なく三年次、四年次に延ばしている学生が、おそらく最も一般教育の理念に即した学生かも知れませんね。(笑) ひじょうにむずかしいと思いますが、専門科目と同時に一般教育の科目、たとえば酒井先生が言われたような形で実施できたら、ひじょうによいのではないかと思います。体育の問題にしてもそうですが、たちまち教室の問題、制度の問題、そんなものがドツと出て、こんなことを言っても、帰りに、所詮せんどうにもならないと言ったにすぎないと思うかもしれません。

四年生にも一般教育を

横山 私は最初の講義に、なぜ登録したかというのを書かすんです。その場合に、「四年生になってもう一般教育の単位はとれていま

すけれども、受けさせていただきます」というのが一クラスに一人か二人、それからもう一つは「四年にもなって般教を残していてひじょうに恥ずかしいですけれども必要なので」という表現になる。両方がひじょうにおもしろいと思うんですね、四年生の方の反応というのは。

私のクラスですと、全員で三百〜五百人ですが、パーセンテージにしたら〇・二から〇・三％は、四年生になってもいるわけです。続いているかどうかは知りませんが、私も、最初の講義なので。だから、ある程度四年生用の一般教育科目を開講することはできると思うんですね。最後の卒業判定とか何とどうか、それこそ大学には言うに言われぬ問題がありますので、ちょっとその辺が困ると思いますけれど、そういうのも何か制度的に保障するといえますか……。

緒方 学生の側から、やはり最初の一年、二年次でとって早く片づけ、そして専門科目に進まなければならないと、直観的に一般教育を専門教育への一つのステップだと考え、専門科目でそれは成就されていくので、その時点ではもう一般教育はなくしてしまっ

いと考えている学生の意識がありますね。

横山 ですから、四年生になったら必ず一つは一般教育をとらなければだめなんだというふうに決めてしまえば、もうはっきり意識改革できると思いますね。つまり一、二、三年で一般教育を百単位とってこようが、四年生にとにかく一つは合格しないと卒業できないだといわれれば、これはもうすぐくはつきり変わってくる。

緒方 でもそれは、むしろいいですね。
松本 いままでしたら大学のほうがむしろ、一年、二年のうちにとってしまいなさいと……(笑)。

横山 履修指導で、残さないようにというようなことを言ってます……。

松本 そうそう、むしろ言っている面があるわけで。ただ、体育なんか一年、二年で済まさないといけない必然性がなく、たとえば三年、四年で体育をとってらって、一年、二年はとらさないとか、そういうようなことも考えられると思うんですね。いま横山さんが言われたようなことと関連しますけれども、大学のほうにもかなり大きな規制みたいなものがあるから……。

緒方 それで専門科目がどんどん下におろされているでしょう。一般教育の中にそのような学料があると、それはぬきんでたウェイトをもつ科目だという印象を学生がもちますし、それから専門科目担当の先生方も、それを一般教育科目以上にやらなくちゃいけないというガイダンスが行われますね。私は、この会合にそなえて、一般教育とは何かというようなことで、今年の履修要綱を見たら、教師のほうには一般教育云々も科目も何もついていないんですね。ところが、昨年のもものは一般教育、学則、一般教育の科目の内容から講義要綱まで入っているんです。

ところが、今年の履修要綱には、大学の措置として学生の分には共通の履修要綱が入っているけれど、教師の分にはありませんね。そうすると、教師の側における例の意識はますます増幅されていくだろうと思います。つまり、私たちは一般教育なんか必要ないとか、だれが何をやっているかさっぱりわからぬことになります。

もちろん、そういう関心があれば事務所で見たらいいじゃないかと言われるかわかりません。

教育効果を上げるには

浜田 そうですね。ことしから別々に要綱を刷るようになりましたために、一面ではひょうに便利ですけれども、いま先生がおっしゃった別の角度からの反省の声もあるわけです。この間も新学期の登録指導をやりますときに、教職課程は教職課程の別冊、一般教育は一般教育の別冊という形になっておりましたため、専門の先生方が一年生から四年生まで登録指導をやるのに、これらを全部見てもおかぬと説明できないわけですね。経費節約のために別個にしたようなんですけれど、一般教育に対する意識にまで影響するとは考え及ばなかったでしょう。

教育効果をあげるには、三つ、すなわち学生側、教える側、それと制度の三つの条件が整わなければならぬと思います。いまおっしゃったように、一般教育が一、二年に集中し、教室の問題とか、時間割りの問題のためにどうしてもやむを得ないという面がある。かりに四年生で一般教育をとらなければいけないというような制度的な枠組みができませんと、これは実際の効果が如実に出てきます

ね。しかし、折角の制度の趣旨も、たとえば要綱を別冊にすることにより専門の先生方に徹底しないとすれば、死んでしまうこととなる。要綱の上では専門科目と一般教育科目の關係が切り離されたこととなります。専門と一般教育、教える側と教えられる側、この間にどうしても行き違いが出てくるでしょう、また、一般教育をよくするためにどうすればいいかの提案も出にくくなる。

これも制度と關係する問題ですが、一般教育担当者がどうしても若い先生方であつたり、あるいは囑託に依存する場合が多うございます。そうじゃなしに、大成された先生方がお持ちいただけのような、しかも好んで持っていただけのような、先ほどもありましたような大学院手当に匹敵する一般教育手当の支給のような制度化ができれば、ずいぶん違うと思います。

横山 学生の立場からいいますと、四年生に一つあるというの、ひじょうにいいことなんですよ。つまり、四年生といえますと、特別な学部は別として相当ひまなんです。優秀な学生にとつてみたら、何しようかという感じがある。ぼくらは国立大学ですけれど、

四年生のとき一単位も残ってませんで、卒論だけという状態なんです。そこへそれこそ学生の立場からいいますと、語学一つぐらひと一般教育一つぐらい必ずとれといわれるとひじょうにいいですよ。その場合、たとえば卒論で忙しい場合にはちゃんとそれを個人的に届けて、こういうときにやりますからというようなことができるような体制というのは、確かに必要ですね。だけれども、これはむしろ教員側がたいへんだと思います。そういう形にした場合には。

緒方 ただ、そうした場合に、たとえば入学生に対する講義のしかたと、四年に対する講義のしかたと、かなりこれは教師本人の研究が要求されると思います。そうした意味では、先ほど浜田先生が言われた教育中心云々というようなことが、ある程度是正されていくのではないだろうかと考えます。教える教師の側にも一つのプライドみたいなものが出ていくのではないだろうか、また、学生にもそれは必要だと私は考えます。

倉敷 制度が認識を変えていることがひじょうに多いですから、そうなれば認識も変わってくる。先ほどのくさび型を一步進めて。

横山 くさびのうえに一つまるを置くとい
うような……。 (笑)

酒井 しかし、必修にいたしますと、教師
の負担もたいへんだと思います。多数の学生
をどうクラス分けして時間割をつくるか、技
術的にも問題がでてまいります。

横山 そうなったら、たとえば四年生用の
というか、卒業生用の一般教育というのは、
そんな大人数でワッと講義したら済むとい
うぐあいには、たぶんいかないでしょうし、だ
から、そういうのが一つつきますと下級生用
の一般教育は、またそれなりに割り切りやす
くなりますね。ひじょうに高度のことは最後
にやりますという形で、四年生の一般教育用
の入門と思ってしゃべればいいという感じの
ものが出てきますね。

倉敷 実際、数人で総合科目をやっている
して、総合性を深めようとするうちに
逆に専門性が高まっているようなこともあり
ますからね。いまおっしゃっているようなこ
とを四年生でやれたら、それはたいへんでき
ようけれども、いい結果が出るでしょうね。

横山 総合科目やっていますと、先生お話し
になっていることの種本なり参考書は何です

かって、聞きにくる。ところが、総合科目と
いうのは自分でいまやっていることをしゃべ
っているところがあるんですね。それでいつ
も言うんですけれども、学者がいまやってい
ることが参考書になるには十五年ぐらいかか
る。まず一生懸命宣伝をして定説化しないと
いけない。それが定説化して始めてどっかの
人が書いてくれるようになるにはずいぶんか
かりますよね。だから、参考書はないと言
いますと、学生にはわからないですね。不親
切だと言います。だから講義があるんだ。

大学の講義の意味がそこにあると言っても、
学生にとってみたら二年生ぐらいですと初め
ての経験なんです。学生側には無理もない
ところありますよね。一般教育というのは
とにかく済ませておけばいいという……。い
ちばんよく言われるのは、法学部へきてなん
で地球と宇宙の科学が必要なんですとか言わ
れる。ところが必要なんです、絶対必要な
んですけれども、必要だというのは説明する
のにこんなむずかしいことはないです。

緒方 私も学生主任とか教務主任などもや
って、学生が卒業級だとか四年になった時
に、一般教育科目を引きずってきていると、

こんなのをまだとっているのかと言ったこと
があります。そうした意識は、かなり多数の
教師にある意識だと私は思います。ですか
ら、私はやはり教師の頭の中からそうしたも
のをできるだけ払拭していただく努力も、そ
れから、抽象的ではなく仕組みについてもそ
れを是正していただきたいと思っています。

横山 一般教育というところとまず理念とい
うことになる。あるところで、私は、理念は語り
尽くされているって書いたところが、そんな
ことはないっておこられたことがあるんで
す。過去の二十数年の一般教育の歴史で、い
ろんな大学で悩んできたところをずっと勉強
してみますと、もう語り終わったという感じ
がある程度あるんですね。それが現実には全
然実現しないものですから、それで皆さんがご
存じないということが一つと、それから実
てないものだから過去の理念がだめだったん
じゃないか、もともと要らないのに、ひつつ
けたのではなからうかという感覚がある。そ
れを何とかするというのは非常に難かしいの
です。実は私も同志社大学へきて初めて一般
教育というのをやらせていただいたわけで、
それまでまじめに考えたことがありませんで

したけれども、やっぱり理念を生かすための制度というものをじっくり考えておく必要があるということが出たような気がします。

最後にまとめという意味で一言だけ何か話をしていただきたいと思います。

まとめにかえて

酒井 私は、一般教育というのはひじょうに重要な、しかも全学的な問題だと思えますので、一般教育の担当者と専門教育の担当者の協力というものが大切じゃないかと思えます。それから、女子大では最近一般教育関係のスタッフだけですけれども、共同の研究懇談を続けています。昨年は「言語と人間」というテーマでやってきました。ことしは「文化と人間」というテーマでつづけていくようですが、そういうふうに、教師間の総合研究体制を、まずつくって、そのうえで、先ほど話題になりましたような研究の条件というものを、もっと拡充していく。一般教育のスタッフであるために研究の条件がウィークであるというのは改めるべきですし、こうした共同研究の総合的な成果をふまえて総合科目の設置ということを考える。いま女子大として

は、そんなことを考えております。

横山 松本先生、いかがでございますか。

松本 私は、一般教育を担当することに對してひじょうにしんどいという実感があります。これをいま制度の上でただちに緩和することができるとは思えません。また私は一般教育を持ち、学部の科目を持ち、大学院を持ちという形になって、どこに焦点を合わせたらいのか迷うような現状があります。結局、教員の側からみて、一般教育を担当しているということでは不利益と言ったらおかしいですが、ほかの科目を担当しているばあいと同じような条件の中でやるんだという、そういうような体制を何とか組んでいかないとにはと思います。そうしないことには、一般教育の理念の問題もなかなか実のつてこないんじゃないか。ですから、理念云々というのは、すでに過去長い間、さまざま論じられて、なおまたここでも論じられているが、そのことは、やはりそういう欠陥が依然としてありながら、なお実現できないでいる、そういうことからみ合ってきているということを書いているとも思えるんです。ここで理論をたたかわしても、どうしようもない。

やっぱり同じ大学で研究と教育を同じような条件の下でやるんだという、そういう形をつくるのが先決だという気がしますですね。

倉敷 私は、同志社でやっております一般教育というのは、宗教学、外国語、保健体育も含めてひじょうにユニークないき方をしていと思っています。その中には基礎的なものもあれば、総合されていかなきゃいけないような性質のものもありますので、先ほどのお話のように下級学年でとらすものと上級学年でとらすものとに区別すべきだということを強く感じました。そういう点では制度を改正する必要がありますかもしれないが、積極的に取り組んでカリキュラムの再編成ができれば、現状から一歩でも進むことができるのではないだろうか、と思います。

浜田 先ほど教育の実が上がるためには学生と教える側の先生と、それと制度の三つの条件が整う必要があると申しました。同志社は比較的うまくいっているが、絶えず向上を図らなければいけないし、また、田辺町の問題がこんど出てきておりますので、工学部が移転されるとか、正課体育がいっしょにいかれるということになってきますと、いままで

のままでもすでに理念どおりにいかない、一般教育をどうしてももう一度考え直さなければいけない時点にきておられますので、そういう意味では先ほども言ったような幾つかの一般教育の欠陥を含めて、制度的に改革できることが大事じゃないかと考えております。

緒方 私は、同志社における一般教育は、倉敷先生も言われたようにユニークだと思いますね。ほかの大学で、単にことが羅列され、あるいは抽象的なテーマで語られているようなことでもかなり実質的な内容をもって一般教育について努力されていると思います。それは全体性とか、あるいは総合性を取り戻して、その中でひじょうに高い理念ですけれども、人間の形成がやはり先生方の中にかなり重く沈澱しんでんしているのではないかと私は思います。

第二の点は、やはり現実の問題です。そういう努力が払われ、理念をうたいながら、現実としては全学的に取り組むようにはなっていないのではないかと、特に専門科目担当の教師、またもちろんそういう教師に接する学生の中にも、やはり一般教育はセカンダリーなものと考えているのではないだろうか。です

から、これはいくら理念を言ってもしかたがないという面もありますけれども、一般教育というものは、絶えず大学の状況の中で声を出して理念をうたっていく場ではないだろうかかと私は思います。

第三には現実の仕組みですけれども、浜田先生を横にして恐縮ですけれど、これほどウエイトをもっている一般教育を主宰しており、責任とっておられる先生は、やはり部長会のメンバーでなくてはおかしいと思います。教務部長と一般教育委員長との関係があります。これはしかるべく考えてくださって、やはり部長会には一人のフルメンバーとして出て、一般教育についての問題を提示したり、必要なことを論議していただくのが当然ではないでしょうか。一般教育委員会の事務組織についても同じですが、私はそこまでやっぱりいくべきだと思います。先ほど松本先生などが言われた研究教育の中における教員の位置づけがもちろん問題であります。たとえば、専門科目は七十歳までで、なぜ一般教育が六十五歳でなくちゃいけないか、これはおかしな話でしょう。ですから、もし理念だけについての了解があったとしても、私は

こういった仕組みというものはやはり是正されるべきものだとおもうように思います。

横山 どうもありがとうございます。

一般教育については、同志社の特徴ある教育は何か、ということが最終的に問題になるというのが、最近の私の感想でありまして、同志社の特徴は何か、ということをもう少し徹底的にみんなで考えてみたらどうかというふうに思います。私はほかの大学からきていますので、同志社大学の特徴がよくわかるつもりです。同志社そのものの特徴というのは絶対ありますし、社会の評価にもありますし、学生の質にもありますし、学生の雰囲気にもありますし、大学の先生方の意識の中にもあります。そういう、何となくあるものを意識化して、それを土台にして考えていくことができないかと思っております。

何回も言いますが、一般教育のことはひじょうにむずかしいので、ここはこの程度にしておきたいと思えます。

どうもありがとうございました。

(一九七七・四・二十五)